

## 戦前日本における教育実践史研究 V

### — 社会認識教育を中心として (郷土教育連盟の郷土学習論と各地の郷土学習の様相) —

#### A Historical Study of the Curriculum and the Teaching in the pre-war Japan

谷 口 雅 子

Masako YAGUCHI

社会科教育講座

(平成14年9月5日受理)

はじめに

- I. 学習対象としての地域への関心の史的展開
- II. 郷土教育連盟とその郷土学習論 (以上本号)
- III. 峯地光重の郷土学習論と実践 (以下次号)
- IV. 郷土教育・郷土学習の種々相  
おわりに

#### はじめに

本論文では、昭和初期に活動を展開した郷土教育連盟を、その郷土学習論を中心にとりあげ、又連盟の周囲で試みられた郷土教育・郷土学習の実践をとりあげて、地域社会と教育との関わりをどう捉えて、子どもにどのような社会認識を形成しようとしたかについて明らかにする。

#### I. 学習対象としての地域への関心の史的展開

地域(郷土)を教材とする事は明治後期に既に見られる。明治三十五年から昭和十四年迄の「郷土教育著書論文目録」(宮原兎一「郷土教育研究序説」『東京教育大紀要』1967年)が作成されているがそれによると「郷土教育に直接関連するもの」(p23)をとりあげた結果計百十九点、多い時期は昭和六年の二十七点、七年の四十点である(pp23~28)。

東京高師附小をとりあげた論文(拙稿本紀要1996年・97年所収)で述べたように地理教授の際の方法の一つとして、子どもを教室の外に連れだし、方法・高低・道路・特徴ある建物等について子どもに説明する事がなされていた。明治初期近代教育導入時に、直観教授が前代の個人教授とは異なる一斉教授における方法とされたが、それは実物ではなく、掛図を用いてのものだった、それに対して文字通りの直観教授として試みられ

た、という事ができる。主として地理・理科等の教科における導入に位置づけられている。こうした立場の教育論書の一つに増沢長吉・桂信次郎著「郷土科教授指針」(明治三十五年、先の論文目録によれば、同年刊の書は本書のみ)がある。郷土科は「児童の身邊に於ける自然及び人事上の簡易なる事項を考案して之を理解せしめ以て事物教授の基礎的觀念を得しめまたこの理解に伴ふ趣味及び愛郷心を養はしめ延て国家的社会的觀念を得しめ談話及び觀察を修練する」(p18)事をめざす。そして「言語が郷土科の目的を達する好方便となる、郷土科がまた言語修練の好材料たる」点からして「国語科中の話し方の部に於て教授せらるべき」(pp16~17)、としている。

東京高師附小の論と実践に刺激を受けてか、教育県として今に至る迄知られる長野県では、師範附小等で郷土学習が試みられた事が『長野県教育史』に述べられている(第四巻のpp247, pp346~362, 第六巻のpp107~135, pp288~295)。『信濃教育』(信濃教育会機関誌)にも「郷土に関する教材表」といったものが載せられている(唐沢貞次郎「郷土二関スル教材表」明治三十六年四月、伊達義治「国定国語読本準拠郷土科教材ノ排列」明治三十六年二月)。

こうした考え・実践は、明治維新时期西洋列強に伍していくために重視した西洋の近代教育の導入の際に直観教授という形で、いささか後世のもの笑いの種にもなるような形式主義を伴って実践されていた教授方法の系譜にある。そして就学率も上昇し、近代教育への民衆の不信の目も少なくなった頃に、日本の教育界により科学的であると見なされて導入されたヘルバルトの教授論ののちとして、教育における郷土教材の意味を論じる事も

なされた。

牧口常三郎<sup>(1)</sup>の『教授の統合中心としての郷土科研究』（明治四十二年）はその一例である。ヘルバルトの教育的教授の考えは、子どもが既に有している思想を分析し、是正し、再構成し、拡充し、かくて意識の統一に導く（篠原助市『欧州教育思想史』上巻、p411）事をめざすものである。もともと日本で一時期誰もが「五段」「五段」と言いならわして、そうした教授案作成とその実行のために「腹がヘルバルト」と言われた、五段式教授段階は、ヘルバルトの論のツィラー等による通俗化であったようである。ツィラーは教授の「形式的段階」を、一.児童の思想界を分析し、新教材の類化に資せしむる（分析）、二.新教材（直観材料）を提示して類化せしむる（総合）、三.系統の準備として、抽象（概念的なもの）を成立せしむる（連合）、四.連合の結果を一定の形式に表現し、之に一定の秩序を与える（系統）、五.学びえたものを既有的知識体系に編入し、かつ応用せしむる（方法）、というものである。これがラインによって予備、提示、比較、総括、応用、というように平易な名称を与えられ、教授段階として日本中に流行する事になった（篠原、p414）。

牧口の論はその書名から知られるように、こうしたヘルバルトの観念類化の考えに基づいて展開されている。「児童は生れ落ちるや否や、郷土における四囲の天然、人事の各方面よりの絶えざる刺激に反応しつつ、生長するによって、学校教育を受ける年令までの間に、すでに非常に豊富なる知識の分量を有する」が、そうした「直観的な基礎観念群を整理しつつ、さらに新鮮にし、明確にしてやるとともに、多少の増補訂正をしてやるところの一つの連続的組織立った作業を要する」（p53）が、それが郷土科でなされる。ヘルバルトの論の影響と共に、日本の社会の資本主義化の動向のなかで、いわば資本主義の合理化の観点からも郷土科の意義が述べられている。即ち「如何にして社会国家の要求する生活に必須なる智識を、所定の時間に於て幼少の児童に最も多く授くべきか」、「如何に教師の教授力と、児童の学習力を経済的にすべきか」、「如何にして教授時間、学習時間の節約を図るべきか」、という事が、知の「生活に応用せしむるべきか」（p7）という問題関心と共に述べられているのである。

明治期の論は、このように日本の近代教育の形式を整えようとするところに発想されていた。しかし、明治末に資本主義的生産が発展し日本がまがりなりにも自立を達成（明治維新期前後に欧米

列強と結ばれた不平等条約の改正）するようになり、しかし日本社会の近代化＝欧米化は貧富差を実質的にも意識においてもその拡大を目立たせるようになる（四民平等の世においては、前代のように富を生まれによる身分差に由来する、と観念するわけにはいなくなり、貧富差拡大へのルサンチマンは前代より強烈であったろう、と推察される）と、それは都市と農村間の問題として意識されて、農村の、都市とは異なる健全性を強調する論が勢いを得る。大正期から昭和期にかけての教育の郷土化として展開された論である。「大正二年頃より教育の郷土化といふことが漸く論議の中心となり、其頃教育雑誌上にはこれに関する論説が可なり多く」なった、と言われている。「孰れも画一的教育を打破して、教育を郷土に立脚せしめ、児童に郷土観念を附与し郷土愛を覚醒せしむべきことを主張してゐる点は共通である」という事である（伏見猛弥『我が国に於ける直観教授・郷土教育及合科教授』昭和十年、p109）。

特に昭和初期の金融恐慌、世界大恐慌等と言われる経済的困窮の状況を、国家の体制の問題と捉えて体制変革の運動が展開されるようになると、それに対抗して、システムの問題ではなく個人の努力の欠如の問題に解消していく体制の対処方法として「自力更生」が強調されるが、教育の郷土化はそうした意味でも主張された。郷土の偉人をその自助努力という点で顕顕しようとする論の系列で郷土の教材を重視する論である。例えば、真野常雄（愛知第一師範附小主事）『郷土教育の実際的研究』（昭和六年）などがそうしたものである。「一切が行きつまった」（p1）という「この未曾有の国難を打開し、皇運の扶翼に精神するところがなくてはならぬ」、それは「郷土愛の啓培を窮極（ママ）目的とせる郷土教育」によるとする（p2）。「明日の郷土建設への郷土愛の覚醒を直接の目的とする」（p21）郷土教育が実施されねばならない。彼は自己の論を明確に「主情主義の立場」（p42）である、と意識している。同校では、各学年に郷土科を特設（週一時）している。既に明治四十一年以来郷土教育を実施している（p7）、というのであるから、東京高師附小の実物教授の教科として設定されたものが昭和初期の動向のなかで、昭和五年に特設郷土科として時流に適應せしめられたものと考えられる（海後宗臣・飯田晁三・伏見猛弥「郷土教育に関する調査」『教育思潮研究』第六卷第二輯、昭和七年一月、pp80～81）。真野の前掲書から明治期からどのような試みがなされてきたかを年代順に記してみよう。明

治四十一年一郷土修身、四十三年一郷土室、大正初期一郷土遠足、昭和四年一野外生活、五年一郷土講話、郷土学会（他に郷土読本が編纂されているが、その年次は不明）である。同校の昭和五年十一月の郷土教育研究発表大会には全国から一千名が参加したという（小原国芳編『日本新教育百年史』第五巻、p575）。

文部省は師範学校郷土教育研究施設に特別支出し、又郷土教育講習会を開いたりして、郷土教育流行の風潮をつくり出した。講習会では昭和七年八月のそれには柳田国男が「地名の研究」を、小田内通敏が「地域社会の研究」を講演している。又愛媛県越智郡盛小校長の森光繁が「我が村の郷土教育」について報告している（『郷土教育』第二十三号がこの講習会の特集号。森は第三十三号に「郷土読本は何を齎したか」を書いている）。

各府県行政当局も又文部省にならって郷土教育を流行させる事に努力している。山形県学務課は「郷土に立脚した学校経営案」を募集し、半年後の第一回締切迄に九十九校が報告をよせた、という（昭和五年、『郷土』第四号、p74）。石川県学務課は、「普及徹底につとめつつあり」と述べている、それは以下のようなものである。昭和六年八月に二日間郷土教育講習会を開催した（講師は奈良女高師教授小川正行〔彼は連盟によって主観主義郷土教育論に区分されている一堀尾彦作「小川正行氏『郷土教育論』を吟味する』『郷土』第二号、昭和五年十二月、p82〕、県内三小学校を郷土教育研究指定校に指定し、発表会を開催させた、県師附小で三日間郷土教育問題について「冬季講話会」を開催させた、また県教育会に依頼して郷土教育資料調査部を設置した（石川県学務課「石川県に於ける郷土教育状況』『郷土教育』第十八号、昭和七年四月、p53）。

行政的支持を得ての「郷土教育の流行には実に驚くべきものがある。最近数年間に於てこの郷土教育程の力を以て教育界を風靡したものが他にあったであらうか」（伏見・飯田・海後「我が国に於ける郷土教育の発達」『教育思潮研究』第六巻第一輯昭和七年一月、p203）というような状況が現出したのである。教育雑誌所収論文のテーマについてみると「昭和二年以降の主なる教育雑誌に就いて見るに、昭和四年までは郷土教育に関する論説は平均二篇乃至四篇に過ぎないが、昭和五年には三十二篇に達し、昭和六年には其前半期六月までに既に六十二篇に及んでゐる」（前掲「我が国に於ける郷土教育の発達」p225）と言われている（先に述べた戦後の文献論文目録とは数が

異なるが、戦後のそれは、郷土史談等は省いており、基準が同一ではないからである）。

困窮化した農村立て直しは、当然内務省の事業でもあり（小作争議等の思想悪化に対処しようとする）、それは全村学校という形で展開された。昭和二～三年頃山崎延吉等が提唱し、五年に福岡県糸島郡福吉村に県知事の主唱により県社会教育課が指導して実施させ、以後中央教化団体連合会が教化村運動を提唱（指定村を設定）して全国的に展開されるようになった（皇垂教育連盟『全村教育の実践』昭和十六年、p39）。村当局が更生のための指針を決定し、村民に実行を促す、その構想のなかに当然思想善導機関として学校が組み込まれていた。昭和初期は内務省、文部省いりみだれて農村学校への指導を強めようとしていた時期といえる。

もっぱら意識改造、即ち道徳教育のレベルで郷土の教材の意義を主張する論が、文部省によっても迎えられる状況下で結成されたのが郷土教育連盟（昭和五年十月結成、機関誌『郷土』、後『郷土科学』『郷土教育』と改称）である。

次節で連盟について述べるが、その流行主張との違いは、その誌名変更を示唆されているように「科学」的たろうとした事にある。そして同時代の郷土教育論には、そうした違いを表すために、自己の立場に「新」を冠する者もいた。例えば、峯地光重（第三節で彼をとりあげる）は、「旧郷土教育は郷土に直観材料を求めるとか、或は郷土の特産とか、偉人とかいふものを自負する、教育の方法論的範囲、乃至は郷土愛教育の範囲を出でないものであった」（『各学年各教科 新郷土教育の実際』昭和六年、p3）、それに対し「新郷土教育はもっと深刻に直下の郷土社会の科学的な認識を目図するものである」（p4）と述べている。

## II. 郷土教育連盟とその郷土教育論の展開

郷土教育連盟の結成は、実業家尾高豊作と地理学者小田内通敏との出会いが契機となっているので、まず小田内について述べよう。

### (1) 小田内通敏<sup>(2)</sup>とその郷土研究論

小田内は、地形学を基礎とした地誌の研究が主流だった日本の地理学界において、人文地理学的研究を進めた、という意味で地理学研究史の中で言及される存在である。

東京高師地理歴史専修科を卒業して早稲田中学の教諭となり、主に地理を担当（中等学校用地理教科書を執筆している、地理教授研究会編『中等新地理教科書 本邦之部』明治三十五年）、そして地理学

者・歴史学者等を訪ねて直接教えるを受ける、等している中で、ドイツの郷土教授 (Heimatkunde) について知り (明治四十二年広島高師での夏期講習会で『教育学術界』明治四十三年九月, p111), 又新渡戸稲造の『農業本論』が「自然と人生との関係を農業によって取扱」(『郷土教育と地域研究』『郷土教育』昭和七年五月増刊号, p120) っている事に触発されて、彼を訪ね (『聚落と地理』昭和三年, 序p1) 郷土会に参加する。郷土会<sup>(3)</sup>は、旧村の研究を唱導していた新渡戸が<sup>4</sup>, 後に日本民俗学を作りあげていく柳田国男<sup>(4)</sup>と共に創立 (明治四十三年) したもので、小田内も牧口も郷土会に熱心に参加し、そこでそれぞれの研究方法や目的意識を明確にしていっただようである。小田内は、新渡戸から学んだ点について「比較よっての傾向の把握」をあげている (『郷土』昭和五年十一月創刊号, p49)。後に調査研究に従事したいが<sup>5</sup>為か中学校を退職、私立研究所の援助を受けて武蔵野調査に従事してその成果を『帝都と近郊』と題して刊行 (大正七年)、以後彼は嘱託という形で省庁の調査を種々依頼され (昭和五年八月に文部省の嘱託となるのも、郷土調査研究の指導を期待されてである) るようになる。大正末からは早稲田や慶応で非常勤講師として人文地理学関係の科目を担当している。昭和三年に文部省社会局の片岡重助<sup>(5)</sup>, 青木誠四郎<sup>(6)</sup> (東京帝大)、熊谷辰次郎 (大日本連合青年団調査部) らと共に村落社会学会を創立している。昭和六年二月附け趣意書は「我が村落社会の本質、組織、機能等を研究調査することは、その教育、その産業、その生活等の改善に根本的の力となる」、そこで学会を創立し「共同実施調査をも行ひ、講演会講習会などをも開催し、更に海外に於ける同種学会との連絡をも保ち、斯学完成に寄附 (ママ) すると共に、我が村落文化の発展にも貢献したいと希ふ」と述べている (『村落社会学会会報』第二集巻末)。この趣意書からすると、郷土教育連盟の創立意図と同様である。心理学者等が参加しているのは、「村落社会の地域的研究、沿革史的研究、社会学的研究、心理学的研究、農業経済的研究、とそれぞれ部門を担当して研究を進め」ようと考えていたからであるが、「海外に旅行する人あり、東京を去る人」 (『郷土教育』第二十一号, 昭和七年七月, p100) ありで、たちまち活動が停滞してしまった。同会では昭和五年十月には柳田を招いて「家族と私有財産に就て」の報告をしてもらっている (同上)。

郷土教育連盟はまず小田内の郷土研究にもとづいて、その教育改造についての宣言をなす。創刊

号の宣言で「経済政策の逼迫や教育政策の固定」によってもたらされた教育のゆきづまりを打開するにあたって、「地理的環境に向って正しき認識を体得する」、即ち「土地と勤労と民族との三つの綜合体」である郷土に「地人相関の新生命」を発見する事である、と主張したが<sup>6</sup>, これは小田内の郷土研究の考えである。彼は郷土認識の研究的活動が<sup>7</sup>, 地域社会のたてなおしにつながるものと捉えている。郷土教育連盟結成後は、その機関誌や『地理教育』にドイツ・フランスの人文地理学的研究、郷土研究、郷土教育等について紹介する論文を数多く書くようになる。

小田内の郷土研究論はル・プレー、ゲッデス等の論の影響を受けている<sup>(7)</sup>。ゲッデス<sup>(8)</sup>については「聚落の地方的進化の諸相に即しての社会的改良を企つる事」を主張した、と評価している (『聚落と地理』p6)。

人文地理学的の研究に関心を寄せた小田内と教育界において明治後期から言われてきた郷土教授・郷土教育論との違いは、注入的教授をさけるため子どもにとって身近である郷土の事象を教材として取り入れる、という教科内容のレベルでの論が中心であったのに対して、彼が自分自身の研究にもとづいて、研究による合理的思考の発達に意義を認めていた、という事である。「考える人」は天皇制国家からすれば、その教育における「期待される人間像」ではなかった。例えば、二百種以上刊行された教育勅語の解説書のうち唯一天覧に供された事によって、以後勅語の正統的解説書の位置を占めた『勅語衍義』の著者井上哲次郎は、頭脳の命令のままに動く手足に国民 (臣民) をなぞらえていた。即ち「君主ハ譬バ心意ノ如ク、臣民ハ四肢百体ノ如シ、若シ四肢百体ノ中、心意の欲スル所ニ随ヒテ動カザルモノアルトキハ、半身不随ノ如ク、全身之レガ為メニ活用ヲナサザルアリ」という。有機体として国家を捉え、支配被支配の関係は有機体の部分間の関係になぞらえる事で隠される。しかし小田内にとって重要なのは、知識を「真に自ら活用することの出来る技能たり教養たり得るようにする」 (『日本郷土学』昭和十五年, p271) 事であつて、教材を郷土に求めるという意味での郷土教育、結局はお国自慢に帰す郷土教育は彼に言わせれば本末転倒したものである (『郷土教育運動』昭和七年, p228)。「『郷土愛から祖国愛に』にといふ合言葉が、到る処に繰返へされてゐる現状を矯正する見地からしても」「自然民族と其の生活環境との関係の認識との教育的応用を出発点とすべき」 (『郷土の認識と其の

教育』『地理教育』昭和八年二月、p95)と述べており、又『郷土教育運動』は副題をThe Regional Survey Movementとしている。これはイギリスの運動の名称(『郷土教育』第二十二号、昭和七年八月、p28)を借りたもので、日本でも同様の運動が展開される事を期待している。彼の村落社会学会・郷土教育連盟に期待したところである

## (2) 尾高豊作<sup>9)</sup>とその教育改造論

尾高は小田内と出会う事で、彼の郷土改造に向けての郷土研究に期待を寄せた。自己の経験に発する教育への不満、即ち「画一的・偏知的・抽象的・非勤労の乃至個人主義的」(尾高「郷土教育運動の十字路に立つ」『郷土教育』第二十八号、昭和七年十二月、p42)である教育を改造しよう、と経歴からすれば特に教育に関わりがない彼が実際活動にのりだすにあたっては、小田内の郷土地理研究論に共鳴して、郷土研究が注入的教授を変え、地域社会を変えていけるような人間の形成に資するだろうという構図を描いていた。即ち地理は子どもの「生きた具体的直観又は認識力を養ふに極めてよい出発点となりはせぬか」と考え、郷土研究を「教育の改革を誘ふ契機」(『郷土教育』第二十七号、昭和七年十一月、p43)とする、そのための組織として連盟を作りあげたのである。子どもによる郷土研究は「自己の直接経験に結びついた観察推理の働きの発展し、やがて之れがあらゆる方面(生活環境)に対する科学研究に分化し精密化して行く」(『学校教育と郷土教育』昭和八年、p375)だろうと考えていた。そして「その研究の結果、これに基づいて未来の生活環境を予見し、共同的にその土地を開発し新社会を建設しようとする」事を期待した(同書p373)。社会改造に位置づけられた郷土研究を推進しようとして、連盟機関誌『郷土』は「研究と教育」という副題をもっていた。

郷土研究の先駆者としての柳田国男(大正二年『郷土研究』誌創刊)は、郷土「を」研究するのか、郷土「で」(日本人の民族性を)研究するのか、という観点の相違から、郷土を研究する風潮を苦々しく思っていたようであるが、しかし彼が郷土「を」研究する事を全く推奨しなかったわけではない。小田内、尾高と同様に郷土を研究して、その郷土社会の改造に役立てるべき事を説いていた。尾高は『日本農民史』の序論に於て、「……単純な学問上の興味を以て、うかうかと深入りすべき時代では無い……」とさへ警告を発して居られる」(『郷土科学』第十三号、昭和六年十一

月、p163)と述べて、柳田が自分達の運動に不満を持っている様子であるのに対して弁解している。

地域社会の改造を意図する尾高が、地域と学校との密接な結びつき、として感心しているのは、学校が社会的革新に貢献せんとしている、と彼がみるソビエト社会である(『郷土』第四号、昭和六年二月、p126、彼は機関誌に「ソヴェート・ロシア小学校の教授要目(抜粋)」を紹介している。『郷土科学』第十五～十七号、昭和七年一月～三月)。尾高が小田内に共鳴したのも、郷土改造に結びつくべきものとして郷土研究を提唱していたからで、その意味では両者共に教育界に一般的であった、教科内容に郷土的なものを、という主張の域にとどまるものではなかった。しかし、文部省囑託の小田内、渋沢栄一の外孫で会社役員といった尾高が組織を作りあげても、文部省とは異なる郷土教育論を主張しているのだ、という事が師範附小の教師や学校長によって理解されるのは難しい。

尾高が「ソヴェート・ロシア小学校の教授要目」を紹介したりしても、マルクス主義の立場で日本社会の変革を考える教師経験者にとっては、連盟は批判の対象でしかない。本庄陸男<sup>10)</sup>は連盟の創刊号宣言についてそれが「ブルジョワ社会に於いて歓迎されるべきは当然」である、と述べている。「学問的教育方法は、現実社会の科学的分析に立って、その発展方向づけをするための認識」ではないとみなしての批判である(「最近の郷土教育思潮」『教育学術界』昭和七年十月、p94)。即ち「十年來の農業恐慌に見舞はれた郷土、農村。古き封建的搾取と資本家的土地所有の撫楯に益々困窮し行く農村。……零細経営と過剰人口に悩む日本の農村に向って、郷土に帰れ！」(p95)と叫ぶのは「現実の階級闘争から、彼(地方農村の教育家諸君—谷口注)の関心を、野や山の自然現象、或は又、骨董の趣味におきかへんとする政策に合致する以外の何物でもない」(p96)と述べている。連盟機関誌『編集室だより』に「世間知らずのマルキシスト」(『郷土科学』第十一号、昭和六年九月、p118)とあり、志垣寛(連盟編『郷土学習指導方案』の草稿著作者)は「マルクス主義の社会改造と相反する」(『郷土主義の学校経営案』昭和七年、p42)と述べたりしている、さらに彼は雑誌『近代教育』編集者であるが、同誌昭和六年十月号に西村陽吉が「マルクス主義を克服するものとしての郷土教育」を書き、又『郷土科学』第十一号に「農村自治への自覚」を書いて、

そのなかで「農村の自主独立，地方分権，農村の地域の自主連合を説くものであって，マルクス主義とは正反対の方向に向ふ」，「マルクス主義は都市的な方法」（p53）と述べている，といった事が影響して，本庄の批判があるのだろう。

尾高が児童社会学会を組織していくにあたっては連盟の運動が自己の予想を裏切るようなものだという認識があった，そして郷土教育から児童研究へという転換には，教育者が農村更生までも教育の課題とするような，教育への過大な期待とは異なる覚めた教育把握があった。即ち「如何に整備した学校でも，そこへ入って来る児童青年の個人並にその集団の間に作用しつつある現実特定の教育効果は，到底よく教師の実験作業に一任し切れない関係に依存して居る」（『学校の社会学的診断』『郷土教育』第二十五号，昭和七年十一月，p83）。そこで「学校教育を支へて居るところの現実の社会的環境全体に目を注ぐ」（同上p84）必要性を自覚して，それぞれの特質を有する地域社会でどのように子どもが成長しているのかの姿をルポルタージュ風に描いた記事が連盟機関誌上に連載されるようになる（連盟『教育新景観』として昭和八年刊）。同様の観点から『新興教育学』（昭和三年インターナショナルの国際教育デーでの調査報告と討論が収録されたもの）について「我々の最も参考となる急所は『社会環境と学校との相互関係』と云ふ問題」であって，その点について「全く画期的な教育学書だ」（『郷土科学』第八号，昭和六年六月，p186）と評価している。学校と地域社会との結びつきを求めた尾高は結局，大人の教育意図の結晶した学校がどのようなものであれ，子どもは教育された存在として成長している，その教育作用を具体的に捉えようとする方向へ関心を移した，即ちヒッドウン・カリキュラムに気づいて，その作用に関心を寄せた，という事である。もっとも中途の関心転換とは必ずしも言えない。連盟機関誌創刊号は原稿募集として幾つかのテーマをあげて説明しているなかで「郷土教育実施の状況並にその結果に就て」をあげ「既に実施した成績と体験とをありのままに記述されたく，特に児童の発達過程に適応した教案の実績（ママ）」の報告，及び「児童の生活環境を描写せる作品」をあげている。

尾高は機関誌上でもっぱら現実に行われている郷土研究，郷土教育に対して批判的な論調で述べているが，その中で推奨すべきものとしてとりあげているのは，兵庫県揖保郡東栗栖小の萩本忠市（彼は連盟機関誌に「郷土に即した学級経営」を

連載している）の「児童と郷土研究」である。「村の全体的な見方と児童の生活指導とが教育的にも如何にも無理なく融け合つて」いる，高等科二年の生徒と共に「自家の農業経営状態を反省し合つたり，日常生活と土地利用との関係を語り合つたりし乍ら，真剣に村を歩き廻つて観察して居る」事を評価し，望むらくは「昔ながらの収穫作業法に停頓して居る土地の農民を激励して，新しい実地調査の結果を，明日の開発の為に活かす道が開けることに一層大きな手腕を延ばされたい」（『郷土科学』第十三号，昭和六年十一月，p163）と述べている。

### (3) 郷土教育連盟の歴史

尾高豊作が人文地理学者の小田内通敏の協力を得て結成した郷土教育連盟は，当初文部省との関係で言えば，文部省が推奨する郷土愛育成教育論と，後に連盟が出版する『郷土学習指導方案』で主張する郷土の科学的調査研究との区別が曖昧な儘で活動を始めたようである。結成月の十日に開かれた集会には，県視学や文部省普通学務局の役人らが出席して「教育の地方化，實際化を計るには，先づ以て各地方の郷土調査を徹底的に行ひ」「地方行政と協力してその大成を期する外はないと云ふやうな談話が交はされ」たという（尾高『郷土』第二号，p119）。尾高の連盟運動回顧によれば「文部省をこの運動に利用する」（『郷土教育運動の四年間を顧みて』『郷土教育』第四十三号，昭和九年五月，p89）つもりだったが，その為に「『郷土愛』主義者の雷同も抑へられなかった」（同上p87）のだろう。

しかし機関誌を『郷土科学』と改称（第八号昭和六年六月より，十八号昭和七年四月号より『郷土教育』，四十三号昭和九年五月号が最終号）するようになるとその科学性を強調して，郷土愛教育論を広めようとする文部省との違いを明らかにしようとするようになる。

論のレベルでは郷土の科学的調査研究が地域社会の人々と子ども・教師との協力によってなされるべき事を主張し，活動のレベルでは，本部に研究部を設置し（昭和六年六月），支部組織を作ろうとしている（昭和七年四月支部規定新設）。本部の研究活動は研究協議会開催という形でも展開された。第一回は昭和六年三月，五十余名が参加して研究発表と講話・講演が行なわれた。

支部はまず小林澄兄<sup>(1)</sup>のいる慶応大に学生支部が作られた（昭和六年六月，支部長は小林，顧問に前塾長の鎌田栄吉と尾高，鎌田が顧問になったりしているのは，尾高の生まれにもとづく交際範

囲が幸いしているのだろう〔『郷土科学』第八号、昭和六年六月、p37及び第十号、同年八月、p93〕。支部作りのために尾高・小田内が各地で講演しているが、その際に文部省嘱託としての小田内の名が講演会開催に有利であったろう、そうした事情は、支部がもつばら各県師範学校関係者によって組織されている事から察する事ができる。山形支部は連盟機関誌の読者をもって構成しその目的は「郷土教育の研究」（『郷土科学』第十五号、昭和七年一月、p129）であるが、その読者は地方教育界のいわば指導的立場にある人々である。秋田支部は六年十一月に発足したが、会長は師範学校長、幹事は附小訓導である（『郷土科学』昭和六年十二月、p112）。和歌山県支部は昭和六年末には成立していて、市内の七校が加盟している（『郷土科学』第十五号、p159）。静岡支部は百五十三名で結成されている（『郷土科学』第十七号、昭和七年三月、p104）。

『郷土科学』の「科学」性については、しかし小田内と尾高との間で相違していたようで、小田内は「『研究』を地域の科学的認識にまで進化させるべき」と考えており、「他方は、『郷土』を児童青年の教育環境として学校と社会との共同的訓練にまで誘導すべき」だ、と考える、即ち郷土の科学的認識にもとづいての「労作教育の主張や合科教授の実施と結びついて新しいカリキュラム改造案を要求」する事を考えていた（尾高前掲第四十三号論文、p88）。

昭和七年に連盟から『郷土学習指導方案』が出版された（昭和十二年に新版『郷土教育学習指導案』と題して刊）。これは、『教育の世紀社』同人で短期間池袋児童の村小の教師を経験した志垣寛（『教育の世紀社』と池袋児童の村小については拙稿〔1998年本紀要所収〕参照）の「草稿を、更に過去半歳に亘る内外の新教育運動の推移と動向とに照して」検討し、「幾度か協議と熟慮の末」「連盟の名によって発表」（p3）したものである。志垣はその経歴からしてあまり郷土研究に深い知識を有していると思われないが、大西伍一<sup>(12)</sup>等の農村教育研究会に所属して研究（志垣前掲昭和七年刊『～実際案』p46）している。又彼はこの研究会参加以前にソ連に旅行して、かの地のコンプレックス・メソッドを知りその紹介をしたりしている（『ソヴェートロシア新教育行』大正十五年）。

『～方案』では郷土調査中心の学習活動が推奨されている。即ち学校の教科を自由に設定できるのであれば、郷土調査がカリキュラムの六割を占め、あとは読書算の基礎教科で十分であるとする

（p27）、こうした考えは、戦後に、問題解決学習としての社会科論、又コア・カリキュラム論として復活したと言える。戦後の論的学的立場はプラグマティズムの教育学者デューイの論に負っているのだが、連盟の場合は、ソ連のコンプレックス・メソッドの影響を受けている。そしてソ連のコンプレックス・メソッドが影響を受けたのは、新教育思潮、そして特にデューイであるから、類似も別に不思議ではない。郷土調査を重視しているその調査対象、即ち郷土科学の分野は自然科学的、社会科学的、「人の研究—自分自身の延長としての隣人の生活を基調としたる」（p9）という三分野で捉えられている。「社会科学の分野は、郷土に於ける生産形態の研究、労働の研究、社会生活の研究、並に観念形態の研究にまで及ぶ」（p10）そしてそれを「小学校むきに」表現すれば、（1）郷土人の生産活動と職業指導、（2）郷土生活に現はれたる社会文化、（3）郷土意識、がとりあげられるべきものとされている。この三分野は柳田の民俗研究の三分野との類似を見る事ができる。自然科学的方面としては、「生産母胎としての自然」と「生産対象としての自然」（p11）があげられている。「毎月一個」の割りで題目が配当され、それが説明されている（例えば、「道の研究」<sup>(13)</sup>）であれば、道普請、道の愛護、等があげられている。pp50～53）が、「学習の過程を以て即目的とする」（p88）ものであつて調査研究の過程で育つ問題解決能力が重視されている、と言える。研究の過程が重要視されるなら、郷土研究の分野を三つに分けて欠けるところがないようにする事は必ずしも必要ではない。『～方案』の草稿を書いた志垣は、別のところでは「各人各様の自由になる研究を許し、その成果について批判し指導すればよい」（『新郷土主義の教育』新興教育研究会『新興教育講話』所収、昭和五年、p301）と述べている。

『～方案』はその書名から明らかなように教師用であるが、郷土調査のためには『郷土調査必携』（連盟編）が刊行されている。これを使用するにあつての注意を石田龍次郎が『郷土科学』第十三号（昭和六年十一月）に書いている。「使用した実例を二十ばかり見たが、筆者の意図した所を了解されない部分が多い」、そして「社会的観点到立つこと」を強調し、その「社会的観点」は「郷土調査」それ自体にあるのではなく「一般的教養による」（p139）と言う。地域社会をどう捉えるかの各人の観点の重要性を指摘しているといえよう。郷土教育を言い、郷土科特設を主張して

も、真野常雄のように「皇運の扶翼」という決まり文句を繰り返すだけの論と実践があるのであり、「一般的教養」の不足を嘆かざるをえない状況だったのだろう。

子どもの調査研究そのものが重視されている以上、全国各地で編纂されている郷土読本に対しては「郷土読本と称して、郷土の産業、教育、交通等々の現代的事項を羅列して学ばせんとするやり方は却って郷土教育を害ふものでしかない。若しそういうものが必要であるとすれば、それは例へば郷土調査必携とかいふ類のもので、単的に数量的に事実を見る様式のものでよい」（『～方案』p94）と述べている。そうしたものとして連盟は中等諸学校・補習学校・諸青年団用『郷土調査帖』（連盟編。都市用・農村用各一冊）を刊行している。又『～方案』の草稿を作った志垣は『郷土学習帳』（「郷土読物と郷土調査とを兼ねるもの」）を刊行している（志垣前掲『～実際案』p173）。

機関誌上でその郷土教育論を展開し、全国各地で講演して支部作りに資し、そしてうまく郷土学習が展開できるようなものを作ってくれ、という読者の要望に対しては、自分でどのようにすべきかを考えるべき、としていたが、相変わらずの郷土愛教育流行の状況に対して、ついに『郷土学習指導方案』を刊行した尾高は、結局直接に教育改造をめざす活動から、一步ひいた運動へと方向転換を図る（本紀要1975年所収拙稿参照）。「初め考へた程郷土教育に革新的意義を期待出来ないような気がする。寧ろ失望と不満を感じた」（『郷土教育』第二十五号。昭和七年十一月、p43）結果である。彼は郷土研究という子どもの研究活動そのものが子どもの思考を科学的なものとし、その科学性によって郷土が改造されていく事を考えていたのであるが、郷土を研究する事が必ずしも子どもの思考の科学的育成に資するものではない事に気づいていく。郷土が子どもの思考の科学的発達に寄与する、と考えていたのであるが、そうした郷土の教育性が現実に存在しているのか、郷土の教育性を無批判的に前提していたのではないのか、なによりもまず子どもの思考がどのように発達していくものであるかについてさえ十分に知らないではないか、という事を反省していくのである。こうした彼の反省は、全国各地を訪れて郷土と教育の現状をよりよく知る機会を得た、という事の他に、その頃紹介され始めたピアジェの子どもの心理についての研究に触発された、という事がある。

尾高は、教科内容に郷土的色彩を取り入れる、

というような一般に流行していた郷土教育論と実践に満足していなかったが、それは彼が実業家として商業的活動が世界的連関のなかにある事を経験していた、という彼の経歴が与かっていたのではないか、と思う。大正期に商社会社の駐在員としてロンドンに二年間滞在する、というのは当時の教育者にあまりない経験である。教科内容の郷土的色彩に満足している教育者に対して彼は次のような批判の言を呈している。即ち『「郷土教育」を実施すると云って、その村の史実やその町の地理的状态を、学者気取りで研究したり調査したりする奇特な人士が地方地方に二人や三人はあるものだが、若しも、これと郷土教育とを同一視するならば、今日の学校制度と云ふものの社会的成り立ちが、『郷土』と云はれる一村一町の小地域関係内に依存して居るのではなく、同時にまたその土地土地に成長する青年児童の未来は、昔のやうな基礎的乃至第一次的社会関係にのみ拘はって居ないと云ふことを余りにも無視しては居ないだらうか』（「学校の社会学的診断」『郷土教育』第二十五号、p85）。

尾高が郷土教育の現状に失望したについては、各地で展開されるそれがただ個別的に、教師個人の意図のみでなされ、一定地域の各学校間の協力がなされないという事態に苛立った、という事がある。次節で述べる峯地の生産学校に関わって、彼の学校を参観した連盟特派記者は「附近の学校の先生達をつかまへて」峯地の学校についての評を聞いて、「良いと思ったら何故積極的に援助しないのか。悪いと思ったら何故M校長の所へどなり込まないのか。ここでも日本教育者の宿命的な癌である非協力性、変な自尊心、妙にお高くとまった批判的態度が、余りにも露骨に出て来る」と述べて、「こうした非協力的な気分がある限り、どんな偉大な教育家が現はれ、どんな素晴らしい教育が行はれても、所詮は一枚限りで終るだろう。教育学者は何時までも外国文献の紹介に浮き身をやつし得々としてゐる。生産教育が地方の熱烈な一校長によって実施されれば、知らぬ顔に、外国の生産学校の紹介をやる」、しかし「何故もっと斯うした進歩的な校長の所へやって来て忠告もし、意見も述べて面倒を見てやらないのか。……記者はこの山陰の特異な生産学校をめぐる附近の先生達の非協力的な態度に内心深い憤激を覚えざるを得なかった」（特派記者「生産する教育」『郷土教育』第三十七号、p31）と、現実を知れば知る程運動のゆくえに懐疑的になっていく様子が窺える論調である。郷土教育連盟を結成して日本



の教育改革を意図したが<sup>3</sup>、無数の小学校の中ではほんの少数がなんらかの試みに乗り出す（それが連盟の意図からすれば批判すべきものであっても）、しかしそれだけ、こうした状況はやはり虚しさを感じさせる事になろう<sup>14)</sup>。

小田内・尾高が郷土研究に教育改造の契機をみて、教科内に郷土の事象を取り上げる郷土愛教育論を批判したのに対して、子どもに身近な事物を取り上げる事には一定の意味がある、という観点で尾高の論を批判したのが<sup>3</sup>、昭和十年代に教育科学研究会の活動に関わった城戸幡太郎である。彼

は尾高の『学校教育と郷土教育』（主に連盟機関誌掲載の論文を収録）の書評で「児童の生活環境を重要なものとして論ずる限り、郷土意識の発達に應」じての「学科課程の郷土化」も「著者の主張する郷土で教育する方法でもある」と述べている（『教育』昭和八年六月、pp144～145）。城戸と尾高の違いは、学校の改革を考えるか、学校と地域社会の改革とを共に考えるかの発想の違いであるだろう。学校の改革だけを考えるなら、城戸のいう事は正論であるが、尾高はそれにとどまらない改革論を考えていた。（以下次号）

### 註

(1) 明治四年新潟県生まれ（父は船乗り、六歳の時伯父の養子となる。彼の生地とその子ども時代の社会環境については斎藤正二『若き牧口常三郎』1981年、が参考になる）。尋常小学四年終了後、独学で北海道師範学校編入試験に合格、卒後同校附小訓導、明治三十年北海道師範助教諭、明治三十四年助教諭兼附小学校長を退職して上京、東京高師の同窓会著溪会書記、その機関誌『教育』編集に従事。明治四十二年富士見尋常小学校訓導に復帰した後市内の小学校校長を歴任（昭和七年退職）、日蓮正宗に帰依し、その観点での教育論と教育改造論を昭和五年より『創価教育学体系』として刊行、その実践組織も同時期から存在していたようであるが<sup>3</sup>、創価教育学会として発会式を昭和十二年にあげる（機関誌『新教』昭和十年創刊、後『教育改造』又後に『価値創造』こんにちの創価学会の前身、『牧口常三郎全集』が戦後創価学会から刊行されている）。昭和十八年治安維持法違反・不敬罪容疑（日蓮正宗を守って、国家神道による天皇を神とする考えをあくまで拒否した事による）で検挙され翌十九年拘置所で没。著書は他に『人生地理学』明治三十三年、『地理教授の方法及内容の研究』大正五年。

(2) 明治八年秋田生まれ（祖父は秋田藩の勘定奉行、尾高も秋田生まれて同郷という縁がある）、旧姓田所（小田内家に養子となった）。1954年交通事故により死亡。

彼が省庁から依頼された調査研究には、大正九年朝鮮総督府委嘱による数年間の朝鮮村落研究がある（総督府刊『朝鮮部落予備調査報告』大正十二年、『朝鮮部落調査報告』同十三年）のち『聚落と地理』（昭和三年）にこの調査研究が活かされている。

小田内が文部省の囑託となった理由については昭和四年秋の文部省の府県視学対象の郷土教育講習会で述べている所から、推察できる。即ち、郷土の改造は地域調査に基づくべきで、改造の実行は町村民の教養と協同によるべきである、そのためには例えば郷土学会というようなものが組織されて、その組合的活動によって改造される、という事が望ましい、しかし「日本のやうな官僚的な国では中央の文部省が、この方面に留意し、中央に其の機関が出来、それが府県に及ぶといふやうにならなければ、其の郷土の改造は望まれないかも知れない」（『郷土教育運動』昭和七年、pp187～198）と述べている。まだあまり地域住民と交渉のあった彼ではないが<sup>3</sup>、地域における自生的活動への期待が薄い。彼の講演を年表にまとめてみよう。

昭和年月	事項
2.	長野県で郷土地理研究会講師
4. 秋	文部省主催府県視学対象郷土教育講習会で「郷土地理研究の過程」
"	師範学校長会議で「師範教育に於ける郷土研究の重要性」
5. 3	山形郷土研究会の招きで郷土研究に関する講演と実地調査指導
10	東京市政調査会主催第二回全国都市問題会議で「都市研究学校の設立」

6. 2	松山市で講演
2	福岡男子師範で「郷土教育と郷土地理」
5	長野県郷土研究講習会出席
6	東京青山師範学校での郷土教育講習会で「郷土研究の方法」
9	パリでの国際地理学会議で「日本の村落人口の地域的特質」「日本の村落居住の考案」
7. 1	兵庫県教育会・神戸市教育会主催兵庫県郷土教育講習会で「イギリス地域調査運動の歴史」
2	長野県主催郷土研究講習会で「アルプス人口減退の地理学的研究」
5	文部省主催第一回郷土教育講演会で発表
6	浜松師範学校講習会で「思想運動としての郷土教育」
"	山梨県主催郷土教育研究・講習会講師
7	岡山市郷土教育研究・講習会講師
8	文部省主催郷土教育講習会で「地域社会の研究」
"	埼玉県川越での郷土教育研究・講習会講師
10	愛媛県郷土教育研究会で「郷土教育の本質」
11	香川県主催村落生活研究講習会で発表（綾歌郡にて）

著書は他に『我が国土』大正二年、『都市と村落』大正三年、『児童文庫 都会と田舎』昭和四年（1949年に『田舎と都会』と題して再刊、再刊時に「前著の内容が『社会科』が新しい教科として生れたにもかかわらず、充分に生かされて居らず」、社会科で「分析と総合ということが忘れられて徒に複雑な社会の分析だけに終わっていることを残念に感じたから」p2、であると述べている）、『郷土地理研究』昭和五年。

論文は下の表の通り（雑誌論文が著書に収録されているので、『郷土地理研究』に収録されていたものにA.『郷土教育運動』に収録されたものにB.を論文題名の頭につける。連盟の機関誌は「郷土」で統一して表示。山崎準二「小田内通敏の経歴と著作・関係文献目録」『静岡大教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第34号所収、があるので、郷土教育関係論文にしぼった。

表1

昭和年月	論文名	掲載誌
2. 6	地理瑣談（7月9月）	地理教育
8	郷土地理への地理実習	"
12	人口と聚落との相関関係	"
4. 7	A地域と国と世界	"
12	Aルプレーの思想と地域研究	"
5. 7	観察と描写	"
7	村落社会考察の一基準	村落社会学会会報
8	聚落の発生	地理学講座第一回
9	人文地理学への展望（10月）	地理教育
11	B郷土科学とその教育	郷土
12	B郷土的特質と其の教育	"
6. 2	1931年の巴里国際地理会議	"
5	郷土研究の勃興と地方学会	"

	6	B郷土研究の本質と其の認識	〃
	7	B地方に於ける郷土地理研究の動向	〃
	8	新渡戸博士の人口論	〃
	〃	B国際人としての地域調査者	地理教育
7.	3	1931年国際地理学会議と日本人文地理展覧会	郷土
	5	B文部省主催郷土教育資料の陳列と講話	〃
	7	聚落の地理学的考察	郷土史研究講座第8巻
	8	Bレヂョナル・サーヴェイ・ムーヴメント	郷土
	〃	B郷土研究と郷土教育の近状	〃
	9	郷土教育講習会に就いて	〃
	10	郷土に対する関心の省察	〃
8.	1	郷土教育の主流と其の組織化	〃
	2	郷土の認識と其の教育（6月迄と9月）	地理教育
	5	農村の学校形態を語る	郷土
	6	村落及都市生活の教育	教育
	〃	郷土の認識と其の教育（8月）	地理教育
	10	郷土教育の実践としての補習教育	郷土
9.	4	過剰人口の地理学的研究と国際地理学会議	地理教育
	5	郷土教育の新しき方向	郷土
	6	郷土調査とその動向	郷土を如何に研究すべきか（大日本連合青年団編）
10.	1	村落共同体の地理的研究	地理教育（増刊）
12.	10	郷土地理研究法	地理学講座第12回
13.	9	日本人文地理学の啓蒙期（10月）	新地理

- (3) 郷土会では各人がその関心に従って調査研究した事がらを報告し、それについて自由な談話を楽しんでいる。大正七年夏には会員が<sup>3</sup>神奈川県内郷村を共同で調査している。調査分担任は、柳田が沿革、草野俊助と正木助次郎が天然と土地、小田内が衣食住、牧口と中桐確太郎が教化及び衛生、田中信良が<sup>4</sup>蚕室、佐藤功一と今和次郎が建築である（小田内『聚落と地理』pp144～157）。調査項目決定には数ヵ月を要したという。柳田によると、この内郷村調査は、例会を重ねるうちに「郷土研究に総論の必要になって来た」と感じられるようになり、行なわれたものだったが、「学問上先づ失敗であった」という。「問題が多岐に失して順序と統一の無かった事、学び得る事は何でも学ぼうとした其態度が悪かった」（『郷土誌論』大正十二年、『定本 柳田国男集』第二十四巻所収、p41）からである。しかし小田内は失敗とは見ていない。むしろこうした集団の研究が各地各所で行なわれねばならない、と考えている。
- (4) 柳田国男の郷土研究論、日本民俗学樹立にいたる道すじについては本紀要所収拙稿（1989年）において取り扱った。
- (5) 徳島県生まれ。県師範卒、農業教員養成所卒。文部省社会教育課に十年余勤務、後社会教育協会主幹（以上、為藤五郎『現代教育家評伝』昭和十一年、pp325～326）。自分の郷土社会調査項目について千葉春雄編『郷土教育の実際研究』（『エデュケーショナル・クォーター』第四集、昭和六年、）に「郷土教育の修正」として載せている。
- (6) 長野県生まれ。県師範を経て東京帝大心理学科卒。同大農学部助教授兼附属農業教員養成所主任、文部省嘱託（社会教育課）（以上前掲為藤書p172）。
- (7) 「私は仏蘭西のルプレーの思想を継承し、それを大成した英国のゲッデスが編み出したものがよいと思ふ」、「私の郷土教育の思想の根柢にはルプレー・ゲッデスの思想が多分に入っている」（『郷

土教育と地域研究』『郷土教育』増刊号、p120)と述べている。ル・プレーは、社会改造を实行するに当たってまず社会事実を統計学的に調査する必要があるとして、家族を単位に家計、家族の地理的地位(環境)、経済的作業(労働)及びこれと関連したすべての社会的政治的制度を分析的に考察してみせた(1855年『ヨーロッパの労働者』。これは、ニスベットによって「近世史上の経済的、政治的諸力によって解体しつつあった伝統的共同態を扱った実地の研究例として、十九世紀最高のもの」と評価されている、という〔新睦人他著『社会学のあゆみ』上巻、p75、1979年〕)。彼は家計費によって、全ヨーロッパから抽出した家族を比較観察して分類するが、三種類に分類されたそれらを共同態における地位階層のなかに位置づけた。彼によれば土地は地理学により、労働は経済学により、住民は人類学により明らかにされ、それらの学的成果の総合的認識・三者の相関関係の究明が社会学の任務である。そして小田内はル・プレーが社会学の任務としている、それを郷土地理研究の課題としている。又ル・プレーが家族を研究の出発点としているのに対して、彼は一軒家から次第に村が形成され、さらに村から町へと発展していく過程での、土地と労働と住民との相関関係の究明を主張する。一軒家から村、村から町へ、という発展過程はもちろん現実には観察されないから、彼は一つの地域における典型的家族の労働力とその家族の生活を支えている耕地・林野とを観察する、という方法を提唱する。労働力の問題は、一年間の労働状態の変化・労働力の使用状態を克明に調査する事からその問題点を摘出していく、という方法を考えている(『郷土地理研究』pp4~19)。地理学は歴史学との対比でいえば、ある場における現在時点にまず関心を寄せ、必要である限りにおいて歴史的発展過程が辿られるが、彼の人文地理的研究は歴史学と地理学とが融合されているような主張である。

- (8) パトリック・～。1854~1932年。イギリスの生物学者、社会学者。スコットランド、パース生まれ。ハクスリーに学び、ダーウィン、スペンサー、ベルグソンから思想的影響を受けた。社会改良家として活躍し、都市計画の必要を初めて提唱した。著書に『進化論』。小田内はルプレーの後継者とみなしている(『郷土科学』第八号、昭和六年六月、p8)。
- (9) 明治二十七年生まれ、昭和十九年没。明治の実業家渋沢栄一の外孫にあたる(父が渋沢の親友尾高淳忠の二男の尾高次郎、母が渋沢の第三女)。又尾高自身は尾高朝雄(学者)、尚忠(作曲家、作曲の尾高賞は彼を記念している)等名をなした兄弟の長兄。大正六年東京高商卒、商事会社入社(ロンドンに二年間滞在)、その後種々の会社役員、学術出版の刀江書院社主等実業家の生活を送る。郷土教育連盟の他に日本児童社会学会(昭和八年創立)と日本技術教育協会(昭和十二年創立)会長、明星学園や子供の家保育園顧問等教育界との関わりをもち続けた。連盟機関誌に発表した論文を集めた『学校教育と郷土教育』(昭和八年)がある。

彼も又小田内と同様各地で講演しているのでその足跡を年表形式で表してみよう。

昭和年月	事 項
6. 6	神奈川県女子師範附小郷土教育研究協議会で講演
"	滋賀県初等教育研究会主催郷土教育協議会参加
夏	和歌山県教育会主催講習会講師
11	府下豊島郡中新井村で郷土教育座談会に出席
"	府下中等地歴教員会で「中等学校に於ける地理の教授を価値あらしむる方策如何」
12	山形支部総会兼講演会で「郷土研究の科学性と郷土地理的教育性」
"	郷土教育研究協議会で「郷土科学の教育的意味」
7. 6	神奈川県女子師範附小郷土教育研究協議会で「学校と郷土」
"	浜松師範郷土教育研究協議会並講習会で「児童の生活と郷土教育」「郷土教育の領域と方向」
11	山形県主催郷土調査研究会で「農村計画と郷土教育」

- (10) 明治三十二年北海道生まれ、昭和十四年没。大正八年高等小卒後尋常小の代用教員（一年間）、樺太で働いた金をもって上京し青山師範本科一年に編入学、十四年卒業して東京市立の有名小である誠之小訓導、在学中から文学に関心を寄せ、昭和二年教員仲間と共に同人雑誌『義足』を創刊、同年前衛芸術家連盟に参加、以後教員組合結成運動と芸術運動に参加していく。昭和五年教員組合結成に関連して明治小学校訓導を免職となる。長編小説『石狩川』は村山知義脚色・演出で昭和十四年上演された（以上布野栄一『本庄陸男の研究』1972年、の年譜〔pp369～375〕）。又拙稿（本紀要1979年所収）参照。
- (11) 明治十九年生まれ。明治四十三年慶応大文学部卒、同大助手、大正三年～六年欧米に留学、帰国後同大教授兼幼稚舎主事。労作教育の研究で文学博士の学位を得る。以上、藤原喜代蔵『明治大正昭和教育思想学説人物史』第三巻、p872及び同書第四巻、p588より。
- (12) 兵庫県生まれ。姫路師範卒、附小訓導、後東京府女子師範附小訓導、後東京市内小学校訓導、その後教師をやめて東京郊外で農業を始める。後日本青年館嘱託。小田内は昭和初期、文部省の嘱託として、又郷土教育連盟関係者として、各地の講習会、講演会に招かれる事多いのだが、彼が印象深く記憶している講習会は大西伍一の農村教育研究会（機関誌『農村教育研究』昭和三年創刊）主催「村落地理研究講習会」（昭和四年八月）である。「地方の農村教育に当ってゐる小学校の先生達の中に農村教育の中核としての郷土意識の要求から新しい意味での村落社会それ事態の研究を必要とし、新しい講習を開くやうになった」事（同上書p105）に感心したのである。大西は、日本で最初の教員組合啓明会に参加、東京下町で小学校教師をしている間の修身教授の様子が啓明パンフレット第三集として刊行されている（『現代少年の社会観』大正十四年）。日本社会の支配・被支配の機構について子どもに考えさせていくような画期的修身の授業である。著書は他に『郷土読本の編纂法と其实例』昭和六年。
- (13) 連盟の『郷土教育講演集』（昭和七年五月）に志垣が「郷土学習の総合学習指導案」を書いていて、「道」に関してより子ども中心の色彩が強い説明がなされている。「1. 子供と一緒に道を歩く」事で、広さ、距離等の目測から議論になり、測ってみるという事になるだろう。「2. 道は何の為に出来たか」「3. 道は誰が作ったか」、これは「政治、道德等の分野にまで及んで来る」、「4. 道はどんな風にして作るか」「5. 道を通るもの」、これは戦後社会科でよく行なわれたような「人畜・車等の通りを調べ、場合によってはその行先や目的なども吟味する」もの、「6. 道の郷土性」「7. 道の道德」（pp54～57）。
- (14) 尾高が郷土教育連盟の運動に関心を失っていくのに対して、小田内は郷土研究の意欲を持ち続ける。連盟設立に関わる事になった彼の論、各地で郷土研究がなされ、それに基づいて郷土改造の方途を見出すべきだ、というそれが連盟によつては果たされないという事になると、日本中央郷土研究所の創設を考えたりしている（実現しなかった）。岩波講座『教育科学』の刊行が機となって生まれた教育科学研究会（昭和十二年～十九年）では歴史・地理教育部会の責任者となっている（『教育』昭和十四年八月、東洋大教授の鈴木俊と共に）。